

# 第 21 回映像メディア英語教育学会

## 九州支部研究大会 2019

The 21st ATEM Conference of Kyushu Chapter

大会テーマ：映像メディアが生み出す多様な学び

Theme: Diversity of Learning through Multimedia

[日時 Date]：2019 年 9 月 7 日（土）（September 7<sup>th</sup>, 2019）

[会場 Place]：福岡大学 A 棟（Fukuoka University, A-Building）



# 第 21 回映像メディア英語教育学会九州支部研究大会

大会テーマ 映像メディアが生み出す多様な学び

Theme Diversity of Learning through Multimedia

[会場 Place] : 福岡大学 A 棟 7 階 (Fukuoka University, A-Building 7F)

[日程 Date] : 2019 年 9 月 7 日 (土) (September 7, 2019)

12:30~ 受付開始 Registration (701 教室 Room 701)

13:00~13:15 開会式・支部総会 Opening Ceremony (701 教室 Room 701)

司会：篠原 一英

- |                        |        |
|------------------------|--------|
| ・開会の辞                  | 吉村 圭   |
| ・会場校あいさつ               | 秋好 礼子  |
| ・2018 年会計報告&2019 年度予算案 | 石田 もとな |
| ・2020 年運営組織の紹介         | 吉村 圭   |

13:20~17:05 研究発表 Sessions (701・702 教室 Room 701&702)

## 701 教室 (Room701)

13:20-14:20 シンポジウム (Symposium)

映像メディアを用いた英語文学の多様な学び

吉村 圭 (鹿児島女子短期大学)

松尾 祐美子 (宮崎公立大学)

秋好 礼子 (福岡大学)

14:20-14:30 休憩 (Break)

14:30-14:55 発表 1 (Session1)

小学校外国語早期化に対応した授業デザイン  
とメディア教材の利用:ESP とリメディアルを  
融合した授業作り

生田 和也 (鹿児島女子短期大学)

## 702 教室 (Room702)

14:30-14:55 発表 1 (Session1)

海外医療ドラマから多角的に学ぶ -専門内容  
からプロフェッショナリズムまで-

南部 みゆき (宮崎大学)

15:00-15:25 発表2 (Session2)

Navigating Digital Information: developing  
21st century skills to better evaluate online  
information

Michael Okamoto (Shimane University)

15:30-15:55 発表3 (Session3)

洋画の台詞と意味研究―「中心的概念」と多義  
分析―

松中 完二 (久留米工業大学)

15:55-16:10 休憩 (Break)

16:10-16:35 発表4 (Session4)

映画を使用した多様な学びの可能性―『映画  
学』の講義を例として―

寶壺 貴之 (岐阜聖徳学園大学)

16:40-17:05 発表5 (Session5)

自律的持続的ニュース英語ディクテーション

小林 敏彦 (小樽商科大学大学院)

15:00-15:25 発表2 (Session2)

日本の医療ドラマから学ぶ医療用語

石田 もとな (鹿児島女子短期大学)

15:30-15:55 発表3 (Session3)

『ロビン・フッド』(1991)の英語教材化―階  
級・人種・宗教を巡るメディア批評トレーニ  
ング―

小泉 勇人 (東京工業大学)

17:10～ 閉会式 Closing Ceremony

司会：林 裕二

18:00～ 懇親会 Party

【シンポジウム】 Symposium 13:20-14:20

## 映像メディアを用いた英語文学の多様な学び

吉村 圭 鹿児島女子短期大学

松尾 祐美子 宮崎公立大学

秋好 礼子 福岡大学

司会：村田 希巳子

本シンポジウムは、英語文学教育において映像メディアを用いることで得られる「学び」の多様性を探求するものである。特にここでは英米文学の3作品を題材に、それらの原作とその映像化作品について考察を行う。

まず吉村は、A. A. Milne が著した *Winnie-the-Pooh*(1926)及び *The House at Pooh Corner*(1928)、そして後にディズニーによって映像化された *Many Adventures of Winnie the Pooh*(1977)を扱い、原作と映画の「語り」を比較する。原作小説の語り手は、息子 (Christopher Robin) にストーリーテリングをする父 (I) である。作中作として語られる「100 エーカーの森」のストーリーにとって、この語り手は創造者=神であるといえるが、彼の聞き手である息子への配慮から、時としてその物語は気まぐれに訂正され書き換えられる。一方映画の語り手は、物語世界の外にいる第三者の語り手として設定されているが、物語内のキャラクターと直接会話し問題を解決するなど、ストーリーに直接介入する。両者に用いられた語り手たちは、設定自体は極めて異なるが、実は作品のメタフィクション性を強調するという効果の点で共通している。このように原作と映画の語り手を比較することによって、単なる英文読解にとどまらない、作品への深い洞察へと学生を導くことが期待できる。

次に松尾は、Louisa May Alcott の *Little Women* を取り上げ、同一の原作に対して、監督の解釈や意図、映画作品内における表現などが時代によって異なるのかについて考察したい。原作は南北戦争当時を背景とした長編小説であり、オルcottの自伝的小説でもある。家族愛が中心ではあるが、作家の生き方を反映し、女性の自立を模索している作品と捉える事もできる。昭和、平成を通して変遷してきた女性の生き方や社会環境は、原作当時と比較して変わったのだろうか。女性の生きにくさや男性の在り方の実際は変わってきているのだろうか。令和の時代に社会へ進出していく学生たちにとって、映画や原作を通して自分たちの足元を見つめ直すきっかけとなるよう考えてみるつもりである。

最後に秋好は、前2発表を受け、小説と映画を使い、「語り」をジェンダー的観点から考察する。アメリカの小説家 F. Scott Fitzgerald の短編小説、“The Curious Case of Benjamin Button”(1922)は、いわゆる「三人称の語り手」によって語られる物語であるが、映画版は小説の語り手が語らない(認識しない)ことに焦点を当てている。その差異に注目することで、文字メディアであれ映像メディアであれ「語り」の視点をどう設定するかは、その作品を鑑賞する者の解釈を左右する重要な問題であることを学生に気づかせる一方法を提案したい。

【発表 1】 Session1 14:30-14:55

小学校外国語早期化に対応した授業デザインとメディア教材の利用：

ESP とリメディアルを融合した授業作り

生田 和也 鹿児島女子短期大学

司会：進藤 三雄

ESP(English for Specific Purposes)はその名称の通り「特定の目的」のために用いられる「英語」能力という位置づけから、その実施には一定の英語力が求められることが多い。一方で大学英語におけるリメディアル教育は、高等教育に必要な英語力が不足する学生への再教育と位置付けられる。よって従来、ESP とリメディアルは相容れ難い。しかし本発表では、この両者が融合する学びの場として、短期大学の児童教育学科における英語授業を取り上げたい。本授業では小学校外国語のメディア教材を用いて、15回の授業を行った。その前後で文部科学省が2018年に提示した小学校教員養成課程の外国語コアカリキュラムに基づいた調査を実施することで、この授業が小学校外国語教育という専門的知見への見通しや、英語を苦手としてきた受講者に与えた効果を、量的かつ質的に考察する。

【発表 2】 Session2 15:00-15:25

Navigating Digital Information: developing 21st century skills to better evaluate online information

Michael Okamoto Shimane University(Nishi Nihon Chapter)

Moderator: Mitsuo Shindo

21<sup>st</sup> century skills are designed to help support modern students' comprehension of those necessary skills in a global society. Although the idea of information literacy has long existed, it often revolves around the ideas of plagiarism, understanding reference use, as well as privacy protection. These topics are important but do not in fact prepare students to properly determine those more nuanced areas of bias and fact checking.

A new online course called "Navigating Digital Information" has taken upon themselves to address these common issues. This English resource allows students to employ their English knowledge while developing their information literacy skills.

Along with this resource, Media Wise, has a great selection of lessons based on civic online reasoning to help improve digital media literacy. The topics covered in both sites are quite similar and allows students an opportunity to apply those skills that they acquired.

During my presentation, I will explain how I have used this video series along with the Media Wise documentation in order to better equip students' understanding of digital literacy. I feel that the pairing of these materials can help improve any classroom that wants to introduce digital literacy.

Media Wise- <https://sheg.stanford.edu/>

Navigating Digital Information- <https://www.youtube.com/watch?v=pLlv2o6UfTU&t=286s>

洋画の台詞と意味研究—「中心的概念」と多義分析—

松中 完二 久留米工業大学

司会：進藤 三雄

本発表では、多義を構成する語義間の関係を「中心的概念」という独自の視点により捉え、live with～の中心的概念とその意味拡張について考察する。

1.心的状態

“A lot of people *live with* hurt.”

「痛みを抱く」(『ロッキー4』)

2.事態

“Who can *live with* so many trees?”

「森の中で我慢する」(『摩天楼はバラ色に』)

3.決定・結果

“We are going to *live with* this for the rest of our lives.”

「責任を取る」(『危険な情事』)

4.提案・申し出

“I’ll just have to find it in my heart to *live with* your offer.”

「受ける」(『ツインズ』)

5.理念・思想

“I kind of *live with* the assumption that all guys owe an apology to the woman they live with.”

「支持する」(『ローズ家の戦争』)

この結果、live with～はその対象物に人物以外を取るときは、病気や望ましくない状態などの否定的事態を対象にし、その中心的概念は「対象物とうまく共存していく」といったものであり、広範な多義を形成する。この中心的概念が英語の母国語話者が共有している意味であり、映画の台詞が意味分析に有効な点を主張する。

【発表1】 Session1 14:30-14:55

海外医療ドラマから多角的に学ぶ -専門内容からプロフェッショナルリズムまで-

南部 みゆき 宮崎大学

司会：福田 浩子

本発表では、看護英語教育で実践した医療ドラマの活用例を紹介する。特に、ドラマを利用した専門英語教育が、2つの側面、すなわち、1) 専門分野の学び、2) 看護職として働くことの意識、について学生にどのような効果があったか、その報告を行う。

研究対象となる学習者は、発表者が担当した医学部看護学科の2年生30名である。実施期間は2019年4月から7月末の約4ヶ月間であり、週1回の授業を、合計15回行った。

発表者はこれまでも、英語教育に海外医療ドラマの利用を取り入れてきた。医師や看護師を目指す学生にとって医療ドラマは間違いなく学生の興味を駆り立てるからである。しかし振り返ると、その授業の多くが医療用語や表現の学習に留まってしまうことが多く、また、映像も授業内だけの紹介であった。専門職を目指す学生が自身の将来を見据えながら、もっと全体的 (holistic) に本授業を受講してもらうために施した工夫や、学生の意識の変化などについて紹介する。

【発表2】 Session2 15:00-15:25

日本の医療ドラマから学ぶ医療用語

石田 もとな 鹿児島女子短期大学

司会：福田 浩子

医療事務を目指す学生が、かなり難しいと感じ、抵抗をためたのが、『診療科』の名称と「診療医」の名称であった。日本語では「お医者さん」「先生」で済むにもかかわらず、診療科ごとに医師の名称が変わること、科の名前が複雑であることは、英語を専攻しない学生たちにとってモチベーションの低下につながる。そのため、好きなメディアから診療科や医師の名称を探し出す活動を行ったところ、メディアで見たものに関しては積極的に覚えようとする姿勢が見られた。当初は、英語への動機づけの目的で、海外ドラマの「ER」等を勧めてみたが、学生はあまり気乗りしない様子であった。その際助けになったのは、日本の医療ドラマである。人気俳優たちが主演を務める「コードブルー」には、モチベーションアップのきっかけを作ってもらった。勉強が好きではない学生に難しいものを覚えてもらうための一助となった試みについて発表する。

【発表 3】 Session3 15:30-15:55

『ロビン・フッド』(1991)の英語教材化

-階級・人種・宗教を巡るメディア批評トレーニング-

小泉 勇人 東京工業大学 (東日本支部)

司会：福田 浩子

本発表は、映画『ロビン・フッド』(*Robin Hood: Prince of Thieves*, 1991)の英語教材化を巡り、階級・人種・宗教による隔たりを問い直す作品として再解釈する試みである。研究の位置付けとしては、発表者が実践する英語教授法自体はあくまでも脚本を用いた音読(オーバーラッピング、シャドウイング)の範疇に留まりながらも、いかにその映画作品/テキストへの興味関心を学生個人の中で高め、映画を分析するメディア批評力を養えるかを重要視するものである。分析の要として、本作における異人種、特にイスラム教徒への眼差しに注目し、現実における西欧と中東の軋轢(湾岸戦争、イラク戦争)と、映画内で描かれる第三次十字軍におけるキリスト教徒とイスラム教徒の和解が奇妙なコントラストを結んでいる点を指摘する。そういった流れの中で、イスラム教徒として設定されたキャラクター、アジームを巡る場面を主に取り上げる。最終的には、本作が 90 年代の作品でありながらポスト・イラク戦争やブレグジットの時代に直面している 21 世紀/令和の時代にこそ共鳴する英語教材/テキストであることを明らかにしたい。

【発表 4】 Session4 16:10-16:35

映画を使用した多様な学びの可能性—『映画学』の講義を例として—

寶壺 貴之 岐阜聖徳学園大学 (中部支部)

司会：吉村 圭

現代のグローバル化が進む世界の中で、英語学習におけるコミュニケーション重視の方向性は益々顕著である。このような時代の中で、本発表では英語教育の視点からのみならず、映画を使用した多様な学びの可能性について考える。具体的には、本発表者が所属する大学で5年前から担当している、学部横断型の教養科目の一つの「映画学」について発表する。

この講義では、アメリカ映画のいくつかの作品についてその俳優にフォーカスを置いてそこから異文化についても学習し、さらに登場人物からその人生観について学ぶ。使用されている英語表現について、映画から英語の名セリフを学ぶことによって学生の英語学習の動機づけを高めることも目標とする。最終的には、好きな映画についての紹介レポートをグループで役割分担して作成できるようになることを目指しているが、映画から英語学習及び俳優の生き方など学際的に多様な学びの展開が可能であることについて考察する。

【発表 5】 Session5 16:40-17:05

自律的持続的ニュース英語ディクテーション

小林 敏彦 小樽商科大学 (北海道支部長)

司会：吉村 圭

本発表では、音読と並び古くから伝統的な英語学習のひとつとして実践されてきているディクテーションの学習効果に改めて着目し、日々放送される英語ニュースを書き取り、スクリプトを分析し、ボキャビル、ディスカッション、ライティングを統合した英語教授法と自律的英語学習法を紹介する。ディクテーションの効果に着目した教授法では、STAGE 1. Preparation / STAGE 2. Dictation / STAGE 3. Reconstruction / STAGE 4. Analysis and Correction の段階から成る DICTOGLOSS (Wajnryb, 1990)が有名であるが、この教授法にスマートフォンの利点を活かして、メディア英語学習の要素を加え、関連語彙の増強、同一ニュースをビデオで見てから行うディスカッション、さらにコメントを英語で書く作業を統合した7段階式のタスクの流れについて詳細を解説する。最後に、この方法で3年間学び続け、TOEFL ITP スコアが467点から600点まで上がった私のゼミ生の英語力上達の自己分析を紹介する。